# 英語結果構文と過去分詞の意味的衝突

## 清 水 啓 子

#### 1. はじめに

結果構文は、構文の形式(統語構造)と意味(概念構造)の関連を考察する上で様々な問題を喚起し、この構文をめぐって膨大な研究成果が発表されている。本論では、結果構文の結果述語の意味に焦点をあて、結果構文全体の意味構造とその部分として生じる結果述語との統合関係に注目する。具体的に分析する問題点としては、なぜ結果述語に過去分詞形容詞が生じないのかを論ずる。

結果構文に関する先行研究では、以下の(1)  $\sim$  (4) に例示されるように、結果述語には、現在分詞や過去分詞などの動詞派生形容詞が生じてはならない、という制約が指摘されている(Green 1972, Carrier and Randall 1992, Goldberg 1995, Goldberg and Jackendoff 2004, etc.)。

- (1) She cooked the roast dry/\*burnt/\*overdone. (Green 1972:89)
- (2) The gardener watered the tulips \*flattened/\*wilting/flat/soggy. (Carrier and Randall 1992:212)
- (3) She kicked the door open/\*opened/\*opening. (Goldberg 1995:196)
- (4) \*He sang himself exhausted/bored/exhilarated. (Goldberg and Jackendoff 2004: 561)

しかしながら、なぜ動詞派生形容詞が許容されないのかという理由を論理的 に明確に提示した研究は管見のかぎり見当たらない (Goldberg and Jackendoff 2004:561 を参照)。この制約に関して、Carrier and Randall (1992) は以下のように述べている。

- (5) ...although APs are the most common category for result phrases, APs headed by deverbal -ing and -ed adjectives are systematically barred from both transitive and intransitive resultatives. (中略) We propose...that the constraint is a semantic one; there is an aspectual clash between the meaning of resultatives and the meanings of -ed and -ing adjectives. (p.184、下線は筆者)
- (6) The problem is between the XP and the verb. (p.212)

ところが、(5)で指摘されている「結果構文の意味と-ed/-ing 形容詞の意味のあいだに存在する "aspectual clash"」とは一体どのような現象を指しているのか、その詳細が示されているわけではない。

本論では、分析対象を過去分詞形容詞のみに限定して、それが結果構文中に結果述語として共起できないという言語現象について、意味論的な、概念構造上の問題として認知言語学的観点から説明を試みる。説明に際して援用する理論的枠組みは、認知文法(Langacker 1987, 1991b, 2008a, etc.)、構文文法(Goldberg 1995, Croft 2001)、使用依拠モデル(Usage-Based Model)(Langacker 1999, Bybee 2001)である。

## 2. 事例と反例

過去分詞形容詞が結果述語として許容されない、という指摘が、実際の言語使用における事実を本当に反映しているのかどうかを確認するために、文献中では容認例として挙げられている過去分詞を含む結果構文や自作の例文を、アメリカ西海岸に住む英語母語話者に提示し、口頭アンケートを実施した。その結果の一部が以下である。15人以上から容認不可と判断された例文にアステリスクマーク(\*)を付与した。

- (7) \*John hammered the porcelain cracked. (影山 2001:177)
- (8) \*John sent Mary the parcel squashed. (Rothstein 2004:129)
- (9) \*The stick hit the glass broken. (大堀 2002:110)
- (10) \*Jane smashed the vase broken.
- (11) He laughed himself out of a job/\*unemployed. (Broccias 2003:152)
- (12) \*They partied themselves stoned. (筆者作例)

以上の事例をみるかぎり、過去分詞と結果構文の統合は許容されないという一般化は妥当であると思われる。ところが、以下(13)~(15)のように、過去分詞が許容される結果構文も存在する。こうした一見したところ例外的にみえる事例については、本論の後半で再び取り上げ、説明を試みる。

- (13) He knocked the chair crooked. (Broccias 2003:168)
- (14) He danced himself tired.
- (15) ??Sally smiled herself tired.(1) (Broccias 2003:131)

## 3. 動詞のアスペクト特性と形容詞の関係

結果構文の様々なふるまいについて、結果構文に現れる動詞と、結果述語として生じうる形容詞(および前置詞句)の相関関係という観点から分析した先行研究がある(Rothstein 2004, Wechsler 2001, 2005, Vanden Wyngaerd 2001, 都築 2006 など)。ここでは、問題としている過去分詞形容詞に関わりのある提案をしている Wechsler (2001, 2005)を取り上げ、その提案によって、過去分詞が結果述語から排除されるという言語事実をうまく説明できるのかどうかを検討する。

結果構文に生じる結果述語にはどのような制約がかかるかについて、表される事態のアスペクト構造と結果述語形容詞の意味特性との相互関係から分析しているのが Wechsler (2001, 2005) である。まず以下で、結果構文で表される事態は有界アスペクト (telicity) を持つことを確認する。

- (16) John hammered the metal (for an hour/\* in an hour).
- (17) John hammered the metal flat (\*for a hour/ in an hour).
- (16)は単純な他動詞構文であり、hammer the metal は非有界アスペクト(atelic)を持つ事態である。その事実は、継続期間を表す for an hour と共起できるが、所要時間を表す in an hour とは共起できないことから明らかである。一方、この文に結果述語 flat を付与した (17) の結果構文は、有界的 (telic) 事態を表し、所要時間を表す in an hour とは共起するが、継続期間を表す for an hour とは共起できない。つまり、結果構文で表される事態は明確な終点(a definite bound あるいは end-point)をもつ有界的事態であり、Vendler (1967) に従え

ば、達成(accomplishments)かまたは到達(achievements)に分類される事態である。

Wechsler (2005) の主張点は、「結果構文の場合、事態の終点 (end-point) を 指定する役割を果たしているのが結果述語である (the property scale is expressed by the resultative predicate. 2005:261)」ということである。この結果述語の結 果構文に対する意味貢献の特徴から、さらに次の2点が予測される。

Prediction 1. When the resultative's predication subject is an argument of the verb (i.e. in a control resultative), homomorphism and coextension between property scale and event are required.

(結果構文の結果述部の主語が動詞の項である場合(コントロール結果構文である場合)、特性スケールと事態の間に同型性(homomorphism)と時間的に同一の広がり(coextension)が存在しなければならない。

Prediction 2. When the resultaive's predication subject is *not* an argument of the verb (i.e. in an ECM resultative), homomorphism and coextension between property scale and event are *not* required.

(結果構文の結果述部の主語が動詞の項でない場合 (ECM 結果構文である場合)、特性スケールと事態の間に同型性 (homomorphism) と時間的に同一の広がり (coextension) が存在しなくてもよい。) (Wechsler 2005:261、訳 筆者)

property scale (特性スケール) と事態の間の同型性とは、結果述語の意味特性 と事態構造の有界アスペクト特性の間に成立する関係である。したがって、Wechsler (2005)はさらに、上記の Prediction 1の場合、結果構文の有界性は次の3つのタイプによって具体化されると述べている。

Type I: The verb is <u>durative</u> (expresses an event that is extended in time); the resultative predicate is <u>a gradable</u>, <u>maximal end-point closed-scale adjective</u>.

Type II: The verb is <u>punctual</u>; the resultative predicate is <u>a non-gradable adjective</u>.

Type III: The resultative predicate is <u>a path PP (to or into)</u> whose object NP specifies the bound. (The verb is <u>normally durative</u>, unless the path is very short.)

(Wechsler 2005:264)

タイプ I は、動詞が継続アスペクトを持つなら、結果述語は段階性形容詞であり、かつ最大値を終点に持つ閉じたスケールを持つ形容詞でなければならない、と予測する②。これには次の例が該当する。

#### (18) John hammered the metal flat.

上の例文(18)では、動詞 hammer は継続相である。また形容詞 flat は段階 的形容詞であるが最大値に終点のある閉じたスケールを持つ形容詞とみなすことができる。何かが一旦完璧に flat になればそれ以上さらに flat な状態になることは不可能である。(18)の結果構文が表す事態の有界性(telicity)は、目的語指示対象 the metal がこの最大値によって閉じたスケールの最大値(flat)になるまで状態変化した時点で 動詞の指示する行為 hammering も終結することから生じる。前述したように、(16)のように flat という結果述語のない単純な他動詞構文であれば継続アスペクトとなり、非有界的事態(atelic event)となる。

一方、タイプ  $\Pi$  は、動詞が瞬間的(achievements)であれば、結果述語には非段階的形容詞が生じることを予測する。(19)がその予測に当てはまる結果構文表現である。

## (19) shoot NP dead, cut NP dead, kill NP dead, knock NP unconscious

また、動詞の表す行為事態と目的語 NP が被る変化過程は時間軸上で同一の 広がり (coextension)を持つという条件 (Prediction 1)を満たさなければなら ないので、以下の (20) が容認不可であることも正確に予測する。学生を飽 きさせる (bore) にはある程度の時間がかかるが、結果述語 dead は非段階的 形容詞であり、瞬時の変化であるため、時間軸上で同一の範囲を占めること はない。

#### (20) \*bore the students dead

以上が Wechsler (2001, 2005) の主張する、結果構文の動詞アスペクトと結果述語形容詞の表す特性スケールとの間に成立する同型性 'homomorphism'

と時間的同一の広がり 'coextension' にもとづく制約である。しかしながら、 実際には以下のように、この制約に合致しない結果構文が容認される。

- (21) Sally battered John senseless. (Broccias 2003:145)
- (21) では目的語 John は動詞 batter によって下位範疇化されるので、Prediction 1 に該当し、したがって 'homomorphism' が成立しなくてはならない。しかし、動詞 batter は継続相であるが、結果述語 senseless は非段階的形容詞である。時間軸上の広がりを見ても、battering がある程度の広がりのある時間の間で行われる継続的行為であるが (Sally battered John for 30 min/\* in 30 min)、結果述語 senseless には段階性はなく (\*very senseless)、意識のある状態から意識のない状態 (senseless) へと変化するのは瞬間的である。したがって、(21) は Wechsler の予測タイプ I に対する反例となる (Broccias 2003)。また前述の (9) や (10) (以下に繰り返す)、および以下 (22) (結果述語が killed の場合) では、動詞が瞬間的であり、結果述語の過去分詞形容詞も非段階的であり (??very broken、\*very killed)、したがって Wechsler の予測タイプ II に合致するのだが、結果構文としては許容されない。
- (9) \*The stick hit the glass broken.
- (10) \*Jane smashed the vase broken.
- (22) John shot the dog \*killed/dead.

以上から、Wechsler の予測は、結果構文の多くに観察されるプロトタイプ的な事例を記述するものではあるが、容認される事例と容認されない事例を厳密に区別できるような、決定的な規則ではないと結論することができる。さらに Wechsler の予測は、結果述語として過去分詞形容詞が生じることを排除するという効力も持たない(上例(9)(10)(22))。これらの議論から、過去分詞が結果構文の結果述語の位置に生じることができないという一般的言語事実の背後にある要因は、動詞のアスペクト特性と結果述語との相関関係の問題ではなく、過去分詞という文法カテゴリー(あるいは過去分詞という形態素)が本質的に持つ何らかの意味的特徴に起因するものではないか、と推論することが可能である。

5 節において、結果構文と過去分詞の不統合(概念構造上の不整合)を考察 するが、その前に、次節で結果構文の事態構造を概観しておきたい。

## 4. 結果構文の事態構造

- 4.1.二つの下位事態から成る複合的事態 (complex event) 結果構文の統語構造および意味構造は以下のように表される。
- (23) Syntax: NP<sub>1</sub> V NP<sub>2</sub> AP<sub>3</sub>(3)
  Semantics: NP<sub>1</sub> makes NP<sub>2</sub> become AP<sub>3</sub> by V-ing it.

結果構文の意味構造において重要なのは、結果構文は2つの下位事態(subevents)から成り、この2つの下位事態は概ね因果関係にあるという点である。

- (24) Willy watered the tulips flat.
- (25) subevent 1: [Willy WATER the tulips] subevent 2: [the tulips BECOME flat] (4)

上の(24)において、Willy's watering the tulips が原因で the tulips become flat が成立する。結果構文の2つの下位事態の間には因果関係が成立すると解釈 されることが多いが、この因果関係性は結果構文に発現する構文的意味である(5)。

この2つの下位事態が結果構文においてどの様に統合されるのか、特に時間軸における2つの下位事態の依存関係 (temporal dependency) は結果構文の分析にとって重要な要素である (Wechsler 2001, 2005, Broccias 2003, Rothstein 2004)。次節でこの点を考察する。

4.2. 下位事態の時間的依存関係 (temporal dependency)

Broccias (2003) は、結果構文の二つの下位事態のあいだに時間的なずれ (temporal gap) が有るか無いかについて、以下のような分析をしている。

(26) The temporal generalization (Broccias 2003:165-6)

If the change phrase refers to a condition of an inanimate entity or a position

of an animate entity, such a condition or position is attained, at worst, immediately after the end of verbal event. If the change phrase refers to a state or property of an animate entity, then such a state or condition can be achieved after the end of the verbal event. (もし変化句が無生物の状態や有生物の位置を指す場合は、その状態あるいは位置は、最悪の場合でも、動詞の表す事態が終結した直後に成立する。もし変化句が有生物の状態や特性を指す場合は、そうした状態や特性は動詞の表す行為が終結してからその後に成立する可能性もある。)(訳 筆者)

ここで Broccias が注目したのは '(in) animacy' という条件である。無生物の状態変化や、有生物の空間的位置変化の場合は、ある行為がなされた後すぐに時間をあけずに結果状態が発生あるいは位置変化が成立するが、有生物の状態変化や特性変化の場合は、原因となる行為が終わってから結果が生じるまでに時間があいてもよい。なぜならば、生命体の変化には反応時間がかかることもあり、また人間の社会構造の中での立場の変化などはある程度の時間を経てから結果状態が成立することがありうる(John laughed himself out of a iob)、といった語用論的要因が関与してくるためであろう。

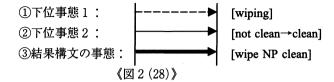
Broccias のこの一般化に従えば、結果構文の二つの下位事態の時間的依存 関係には、以下に示すように、三つのパターンが存在することになる。

- i)時間軸上で同一の広がりを持つもの (=Wechsler's coextension)
- ii) 時間軸上で部分的に重なるもの
- iii) 時間的にギャップがあるもの
- i)からiii)に当てはまる例を以下(27)~(31)に示す。またそれぞれに対応する二つの下位事態とそれらを統合した結果構文事態の時間軸における重なりを、《図1~5》に示す。図の中の縦線は結果構文全体の時間の境界あるいは成立時、①の点線矢印は動詞の表す行為(下位事態1)、②の細い実線矢印は目的語指示対象の状態変化の事態(下位事態2)、③の太い実線矢印は結果構文全体について、それぞれが時間軸に占める範囲を表している。

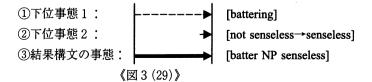
- i) 時間軸上で同一の広がり (coextensive)
  - a) punctual: (27) John shot the frog dead.

①下位事態 1 : [shooting]
②下位事態 2 : [dead]
③結果構文の事態 : [shoot NP dead]

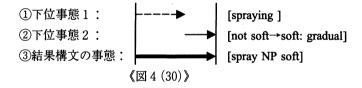
b) durative: (28) John wiped the table clean.



- ii)時間軸上で部分的に重なる(部分的に終結点だけが重なる)
  - (29) Sally battered John senseless. (=21)

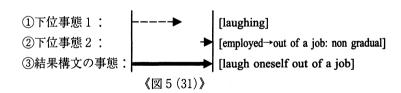


- iii) 時間軸上で重ならない、あるいは隔たりがある
  - (30) Sally sprayed her skin soft. (時間が重ならない) (Broccias 2003:145)



## (31) He laughed himself out of a job. (時間的な隔たりがある)

(Broccias 2003:152)



《図1》~《図5》から明らかな様に、2つの下位事態が時間軸上で同一 の広がりを持とうと、重なりが部分的であろうと、あるいは重なりがなかろ うとも、結果構文全体としては、動詞の表す行為事態で始まり、目的語指示 対象の状態(位置)変化の達成で終結する、という点ではすべての事例が一 致する。つまり、構成要素となっている二つの下位事態を別個に見て分析す れば、時間的な重なりの点で一貫した規則性が無いように見えてしまうが、 結果構文という構文形式は、二つの下位事態を因果関係という要因によって 一つの場面に統合し、意味的にまとまりのある一つの(複合的)事態として 全体的にゲシュタルト把握する、という概念化作用の言語的な表出なのだと 言えよう(6)。また、下位事態の時間的依存関係は、動詞のアスペクトや形容 詞・前置詞句の意味から、概ねの傾向として、前節で検討した Wechsler (2001、 2005) のような予測が立てられるかもしれないが、それも絶対的な制約では なく、語用論的・百科事典的な意味に大きく影響されて、予測が当てはまら ない場合もある。同様に、Goldberg (1995:193-195) も、結果構文において動 詞で表される行為の終結と同時に目的語指示対象の状態変化が成立しなけれ ばならないと述べ、時間的な隔たりがあれば結果構文では表せないと言って いるが(7)、上述の(30) や(31) のような例があることから、この Goldberg の提案する制約もやはり結果構文のプロトタイプ的な事態構造についての記 述であり、決定的なものではないと言える。結果構文という構文カテゴリー は、家族的類似性を持った関連性のあるいくつかの構文タイプから構成され るプロトタイプカテゴリーなのである (Goldberg and Jackendoff 2004)。

## 5. 過去分詞

3節において、過去分詞形容詞が結果構文の結果述語として生じることができないのは、過去分詞という文法カテゴリー(過去分詞という形態素)に本質的に備わっている何らかの意味特徴に起因するのではないか、という指摘をした。本節では、過去分詞形容詞の意味特徴およびその結果構文との整合性について考察する。

## 5.1.過去分詞形態素 [PERF] の意味構造

まず始めに、Langacker(1982, 1991b)に基づき、過去分詞形態素の意味構造を認知言語学的観点から分析する。Langacker は、-en などの異形態も含めて代表的には -ed という形式で表される過去分詞形態素を [PERF] というスキーマに抽象化し、それを意味極のプロファイルの違いから [PERF1]、[PERF2]、[PERF3]と分類した。以下では、結果構文に関連する [PERF2]と [PERF3] を考察する。

- (32) a. The infield was *covered* with a tarp (all morning). [PERF2] 内野は (午前中ずっと) 防水シートで覆われていた。
  - b. The infield was *covered* with a tarp (in five minutes). [PERF3] 内野は (5分で) 防水シートに覆われた。

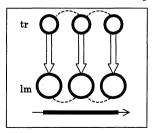
(Langacker 1991b:132)

上の例(32)a における covered は [PERF2] の用法で、副詞句 all morning が 共起することから、動詞 cover が表すプロセスの結果状態(「覆われている」)のみを静的に表している形容詞的な過去分詞の用法である。一方(32)b の covered は [PERF3] の用法であり、副詞句 in five minutes から明らかなよう に、「5分間かかって覆われた」という時間軸にそって徐々に展開していく変化プロセスを現す受身の過去分詞用法である。

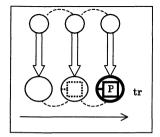
cover という動詞を例にして、動詞の原型、形容詞的過去分詞 [PERF2]、受身の過去分詞[PERF3] を認知文法論の枠組みからスキーマで表示すると、以下の《図6》のようになる。(a) は動詞 cover の原型を表し、トラジェクタ(tr) からランドマーク(lm) へ covering という行為がなされる。図の下部にある矢印は時間軸を表し、その上に太線が上書きされているのは、covering という行為が時間的にプロファイルされている(temporal profile)、つまり時

間軸上に沿って展開するプロセスを順次的に走査(sequential scanning)していることを示している。(b) は静的な形容詞的過去分詞である [PERF2] のスキーマで、意味内容のベースは(a)の原型動詞と同様であるが、プロファイルされているのは covering の作用をうける被動作者であり、かつ covering のプロセスを受けた結果の状態にあることが表されている。動詞としてのプロセスの意味内容はベースにあるだけでプロファイルされない。一方(c)の [PERF3] は動詞のプロセスのすべてをプロファイルしているが、(a)の原型動詞と異なるのは、covering の動作を被る被動作者がトラジェクタ(tr)となり、動作を及ぼす動作者の方がランドマーク(lm)になっていることと、さらに時間的なプロファイルが無くなり、プロセス中のすべての状態を一括に走査(summary scanning)する非時間的なプロファイルに変化していることである。この非時間的な [PERF3] を使って受身文を作るためには、典型的には be 動詞によって時間的プロファイを復活させなければならない。

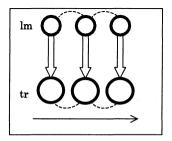
《図6》 cover のスキーマ (a) 原型動詞、(b) [PERF2]、(c) [PERF3]



(a) 原型動詞 (cover) temporal process



(b) [PERF2] (covered in (32a)) atemporal result state [P] of the verbal process



(c) [PERF3] (covered in (32b)) atemporal profiling all the states in the process

- (b) の [PERF2] の静的な過去分詞の場合、動作を受けた結果状態だけをプロファイルする、と述べたが、だからといって動詞のプロセスのすべてが無関係になってしまうということを意味するわけではなく、意味内容のベースとしては残留している。この事実は以下の例で明らかである。
- (33) dried flowers, dried fruit (ドライ・フラワー、ドライ・フルーツ)
- (34) dry cell, dry cereal (乾電池、乾燥シリアル)
- (33) のように形容詞が [PERF2] の dried の場合は、flowers あるいは fruit はもともとは dry ではなかったものが drying というプロセスを経た結果として dried に変化したことを意味するが、一方 (34) のように単純形容詞 dry の場合はそうした drying プロセスの結果という含意は持たず、修飾される対象は最初から dry であってかまわない。[PERF2] と単純形容詞の決定的な意味上の差異は、前者は動詞で表されるプロセスを経た結果の状態を表すということである。
- 5. 2. 結果構文と過去分詞の統合 (Integration of a past participle with the resultative construction)
- 5.2.1. 結果述語は [PERF2] か [PERF3] か

結果構文の結果述語に過去分詞が埋め込まれた場合、その際に生じる意味構造は[PERF2]と[PERF3]のどちらなのか、が重要な問題となる。

結果構文の統語構造と意味構造の関係について、Goldberg and Jackendoff (2004:538)は、make や get といった本質的に結果構文的な意味を持つ動詞 (intrinsically resultative verbs) の意味構造と統語構造の対応関係は、それ以外の動詞から成る結果構文の意味構造と項構造の対応に対してテンプレートとして利用されている、という趣旨のことを述べている(8)。

(35) Consider actual verbs that have the meaning 'X cause Y to become Z', such as *make* and *get*. These show exactly the same distribution of arguments in syntax as the [resultative] construction: Wily made/got the plants flat. That is, whatever generalizations are responsible for mapping the semantics of these 'intrinsically resultative' verbs to their syntactic argument structure can also

be used to map the constructional subevent to its syntactic argument structure.

では、以下の例文のおいて結果述語として現れている elected や fired は [PERF2] と [PERF3]のどちらであろうか。

- (36) He got his nephew/himself elected mayor. (Langacker 1982:76)
- (37) He got himself fired.

上の例では動詞はどちらも get であるから、一定の状態が継続していることを表す [PERF2]ではありえない。目的語指示対象は、それぞれ [not elected] elected]、[not fired⇒fired] という状態変化を被る。また文全体のアスペクト構造を見ても有界的 (telic) 事態であることは以下 (38) から明らかである。

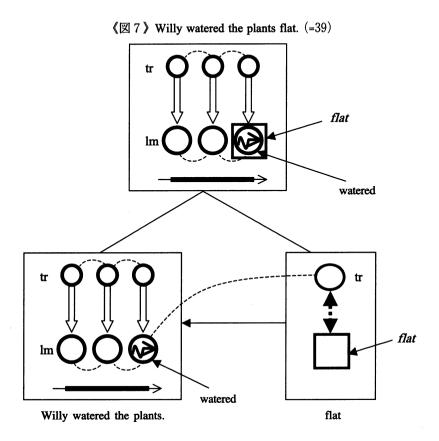
(38) John got himself fired in three months/\* for three months.

つまり、Goldberg and Jackendoff のように get や make は本質的な結果構文的意味を持つ動詞であり、 $[NP_1]$  get/make  $NP_2$  AP] という項構造が、get や make 以外の動詞を述部に持つ結果構文にもそのまま継承されるという主張が正しいのなら、結果構文の結果述語 AP として過去分詞が現れた場合、それは静的な形容詞の意味構造の $[PERF_2]$ ではなく、動詞のプロセス全体をプロファイルに含んだ動的な  $[PERF_3]$  である、と結論づけることができる。

5.2.2. 結果構文と過去分詞 [PERF3] の意味上の衝突あるいは不整合本節では、get や make ではなく、結果状態に至らしめるための何らかの具体的な手段行為を現わす動詞を述部に持つ結果構文において、なぜ結果述語に過去分詞 [PERF3] が生じることができないのかを考察する。

まず比較のために、単純形容詞を結果述語とする結果構文を考えてみる。

## (39) Willy watered the plants flat.



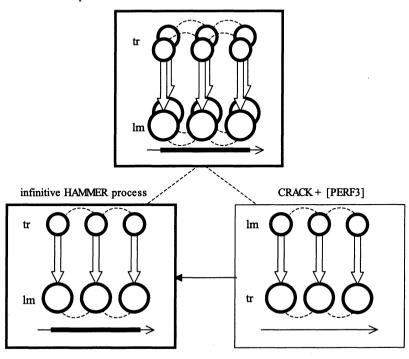
例文(39)は概略的に、《図7》のように考えられる。Willy watered the plants を表わす左下の図において、トラジェクタの Willy はランドマークの the plants に対して watering の動作を行う。これは時間的にプロファイルされる 事態である。ランドマークの the plants は watering プロセスの影響を受けて いるので、そのプロセスによって受けた被動性(watered)をランドマークの 中の太線矢印で表す。さらにランドマークの the plants は watering 行為を被った結果、flat 状態にも変化している。右下の図のように、この flat な状態であることは太線の四角で表す。最終的には《図7》の上部で表したように、ランドマークの the plants は watered でありかつ flat 状態である。しかし単純

形容詞 flat は結果構文に統合されても、ランドマークの the plants の最終的な状態をプロファイルするだけであり、意味構造上の不整合は何ら生じない。 つぎに、以下(40)のような、過去分詞を結果述語に持つ容認されない結果構文について考えてみる。

- (40) \*John hammered the porcelain cracked.
- (40) の容認可能性について英語母語話者にたずねると、概して、以下のよう に言い換えたほうが良いと言う。
- (41) a. John hammered the porcelain and it cracked.
  - b. John cracked the porcelain by hammering it.
- (41) a は二つのプロセス (hammering と cracking) を別々の節に分けた表現であり、(41) b は原因となる行為 (hammering it) を付加詞として加えた表現である。つまり英語母語話者は (40) に対して「二つのプロセスが混在している」という違和感を持つのだろう。この母語話者の直感は、以下の《図8》のスキーマとして表すことができる。

## 《図8》\*John hammered the norcelain cracked. (=40)

2 processes (HAMMER/CRACK) in 1 clause ⇒ clash



Verbal Event
(JOHN HAMMER THE PORCELAIN)

Constructional Result Event [PERF3]
(THE PORCELAIN BECOME CRACKED)

4.2 節において、「結果構文とは、二つの下位事態を因果関係という要因によって一つの場面に統合して意味的にまとまりの有る一つの(複合的)事態として全体的にゲシュタルト把握するという概念化作用の言語的表出である」と述べた。結果構文は複合的ではあるものの、一つの事態としての概念化なのであり、事態の全体的な時間的プロファイルは文の主要部である本動詞によって表される。(40)の場合は hammer が事態構造のプロファイルを決める。一方、[PERF3] の cracked は時間的なプロファイルは失っているものの動詞のプロセスとしての意味内容は保持しているので、時間的プロファイルが本動詞 hammer によって復元されれば、crack のプロセスも時間的プ

ロファイルを受けることになり、時間軸上で cracking プロセスが展開する順次的走査 (sequential scanning) を受けることになる。すると、\*John hammered the porcelain cracked と言った場合、同一の時間軸上を hammer プロセスと crack プロセスが同時に展開することになる。結果として過去分詞のプロセス情報が本動詞のプロセス情報と衝突してしまう。つまり、一つの事態を二つのプロセスで描写(プロファイル)することになってしまうのである。ここで違反されている制約は、結果構文だけに特徴的に生じる制約ではなく、英語全般に適応される原理(一つの節に対し、一つの主要部 'one clause, one head') である。言い換えれば、以下の(42)の結果構文が容認されないのは、(43)の英文が容認されないのと同じ原理に従っているにすぎない、と言える。

- (42) \*John shot the frog killed.
- (43) \*John shot killed the frog.

同様に、前述(40)の結果構文が許容されないのは、次の(44)が許容されないのと並行する。

(44) \*John hammered cracked the porcelain.

また自動詞結果構文についても同様のことが観察される。以下のように、前述の(32)において、be 動詞を get に交換できるのは(32)bの [PERF3] の場合だけであり、したがって get-passive 構文に生起する過去分詞の意味は [PERF3] であることが明らかである。

- (32) a. The infield was/\*got covered with a tarp (all morning). [PERF2] 内野は (午前中ずっと) 防水シートで覆われていた。
  - b. The infield was/got *covered* with a tarp (in five minutes). [PERF3] 内野は (5分で) 防水シートに覆われた。

以下の get-passive の例文 (45) において、動詞 get を (46) のようにプロセス 内容が具体的な別の動詞と交換することは出来ない。これは本動詞の fight プロセスと [PERF3] の stab プロセスが一事態の中で重なり衝突してし まうためである。

- (45) He got stabbed.
- (46) \*He fought stabbed. (He got stabbed by fighting somebody という意味で)
- 5.3. 二次述語が過去分詞でもよい場合
- 5.3.1. 本質的に結果構文的な意味構造を持つスキマティックな動詞 前述したように、結果述語が過去分詞であっても容認されるのは、Goldberg and Jackendoff (2004) が指摘しているような 'intrinsically resultative verbs' の 場合である。典型的には、(47) のように、get や make があげられる。
- (47) a. John got/\* laughed himself fired.
  - b. I had to shout to make myself heard above the music.

なぜこうした動詞の場合は結果状態を表す補部が過去分詞であっても容認されるのかという理由は、make や get ではそれぞれ元々の意味(「作る」、「手に入れる」)が希薄化し、文法化の作用を経て、使役を表すスキーマ的な意味だけを表すように変化しており、プロセス情報を詳細に指定していないためである。したがって過去分詞が時間的プロファイルを動詞(make/get)から受けて(9)、そのプロセス情報が復元されても、動詞とのプロセス情報の衝突は生じない。

- (48) a. John made the plan. (作成動詞)
  - b. John made the process simple. (使役動詞)
  - c. John made the process organized and efficient.
- (48) a の make は「作る」という意味の作成動詞であるが、(48) b の make は使役構文 [NP1 make NP2 AP] の意味構造を具体化する鋳型のような動詞として使われている $^{(10)}$ 。(48) b の使役構文において、make は John がどのような方法や手段で the plan を simple にしたかについては何の情報も含んでおらず中立的であり、使役という最大限にスキマティクなプロセス指定をしているだけである。したがって (48) c のように、過去分詞 (organized) に

よってその結果状態にいたるプロセスが上書き的に指定されても意味構造上の衝突は生じないものと推測される。以下 (49) でも b のように行為動詞が shout の場合は understood や heard という目的語補語とプロセス情報が重複するので容認不可となる。

- (49) a John make himself understood/heard
  - h \* John shouted himself understood/heard

## 5.3.2.描写述語の場合

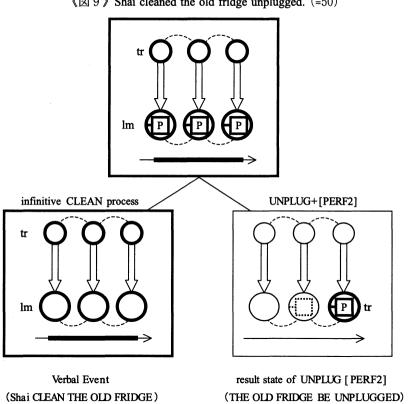
以下 (50) は、表面的には  $[NP_1 \ V \ NP_2 \ AP]$ という結果構文と同じような統語構造をしている。しかしこの場合、文末の AP (unplugged) は結果述語ではなく描写述語であり、(50) は結果構文ではなく描写述語構文  $(depictive\ construction)$  である。

- (50) Shai cleaned the old fridge unplugged. (Rapoport 1993:165)
  - a. \*(結果述語読み)シャイは古い冷蔵庫を掃除して、コンセントが 抜けてしまった。
  - b. (描写述語読み)シャイは古い冷蔵庫のコンセントを抜いた状態 で掃除した。

上例における unplugged は行為動作 cleaning の結果として目的語指示対象 the old fridge が変化した結果状態 (「冷蔵庫を掃除したらコンセントが抜けてしまった」という解釈) を指すのではなく、行為動作 cleaning を始める時から終わるまでの間ずっと the old fridge に付随している状態 (「コンセントを抜いた状態」)を表している。この AP は付加詞 (adjunct) と分析され、語彙構造意味論的に言えば、動詞がその語彙の意味として必要とする項ではない (Rapoport 1993:168)。この描写述語 unplugged は過去分詞であるが、掃除される間の時間軸において the old fridge がずっと保っている一定した静止状態を示しているので、意味構造は [PERF2]である。以下の《図9》では四角に囲まれた P が静的な unplugged の状態を現している。 [PERF3]のように、動詞 clean によって時間的プロファイルを受けて unplug というプロセスを時間軸に沿って順次展開 (sequential scanning) してゆくわけではないので、clean

プロセスと unplug プロセスが同時進行するわけではない(同一事態に複合されて同時進行しない)ので、たとえ過去分詞形であっても、結果構文の際に生じるような二つのプロセスの衝突という意味的不整合は生じないのである。

《図 9 》Shai cleaned the old fridge unplugged. (=50)



#### 6. 結果述語として許容される過去分詞

6.1. 反例と見える事例と使用依拠モデルによる動機づけ(11)

結果述語には過去分詞が生じることができないという制約は言語的事実に 対して記述的妥当性を持つと認めた上で、その概念的な説明づけを前節まで において考察した。最後に本節では、一見するとこの制約に対する反例と思 われる以下のような事例について検討する。

- (51) He knocked the chair crooked. (=13)
- (52) He danced himself tired. (=14)
- (53) ??Sally smiled herself tired. (=15)
- (51) の結果述語 crooked は、一見したところ形式的には 動詞 crook の過去分詞形 [crook+ed]のように見える。この crooked に関しては動詞派生と名詞派性のどちらであるのかを明確に判断することが難しい(12)。しかし、歴史的な経緯は不明であるものの、British National Corpus や Google などのサーチ・エンジンで検索をしてみると、動詞として使われている crook の使用例がない。このことから少なくとも現代英語の crooked は動詞的プロセスの意味内容が消失し、単純形容詞として使われていると判断してよいだろう(13)。動詞派生ではなく単純形容詞として認識されているのであれば、動詞的なプロセスが意味内容のベースに存在せず、したがって (51) の本動詞 knock のプロセスと一事態の中での衝突する意味内容もないので、容認される結果構文となる。
- (52) や、やや容認度は低くなるが (53) のような例については、何がこうした表現を動機付けているのかを考察することは必要である。規則 (制約) に従う事例とそれには従わないが言語事実としては容認される例外事例を、別途のカテゴリー (grammar と lexicon) として分離して、例外事例に対する説明を放棄してしまうのではなく、同じ一つのカテゴリーとして扱い、内部的にはプロトタイプ構造を形成するものとして、一見例外的に見える周辺的事例に対しても、プロトタイプとの関連性から何らかの動機づけを探る、というのが認知言語学のアプローチである。このアプローチでは理想化された言語だけでなく、言語使用者の実際の言語使用としての言語現象を余すところ無く捉える記述的妥当性が優先される (上原・熊代 2008など)。
- (52) や (53) のような過去分詞を結果述語とする事例を説明するために、ここでは、「使用依拠モデル (Usage-Based Model)」(Langacker 1999、Tomasello 1999、Bybee 2001)を援用する。使用依拠モデルとは、

(54) "substantial importance is given to the <u>actual use</u> of the linguistic system and a speaker's knowledge to this <u>usage</u>... [It is a] nonreductive approach to linguistic structure that employs fully articulated schematic networks and emphasizes the importance of low-level schemas"

(Langacker 1999:91 下線 筆者)

というように、文法規則からトップダウン的にそれぞれの言語表現が生成されるのではなく、抽象度の低い具体的使用例からボトムアップ的にスキーマが抽出され、具体的事例とスキーマのネットワークが話者の言語・文法知識を構成するという、つまり言語知識に対する経験基盤主義的、非還元的な捉え方である。また、話者の言語知識において、非常に抽象度の高いスキーマよりももっと具体性のある抽象度の低いスキーマが活用されているのではないかと提案されている。

言語習得の分野から使用依拠モデルを主張している Tomasello (1999)は、子供の初期の言語能力は、抽象レベルのスキーマ抽出ではなく、個々の動詞ごとの構文リストに基づいていると言う (Verb Island Hypothesis (動詞の島仮説))。(55) に述べられているように、この仮説によれば、子供は始めから構文構造 (統語構造) を習得するのではなく、特定の語彙の具体的使用パターンとして構文が習得され、成長するにつれて色々な語彙 (動詞) の使用事例が増えてきた段階で構文構造が抽象化されて、徐々に大人のような言語知識に達する。特定の語彙 (構文の場合は特に動詞) に密着した形で構文構造が習得・記憶されていくのである。

(55) "The verb island hypothesis proposes that children's early linguistic competence is comprised totally of an inventory of linguistic constructions of this type: specific verbs with slots for participants whose roles are symbolically marked on an individual basis. At this early stage children have made no generalizations about constructional patterns across verbs, and so they have no verb-general linguistic categories, schemas, or marking conventions. To repeat, the inventory of verb island constructions—in effect a simple list of constructions organized around individual verbs—makes up the totality of children's early linguistic competence; there are no other hidden principles,

parameters, linguistic categories, or schemas that generate sentences."

(Tomasello 1999:139 下線 筆者)

- 一方、主に形態論の分野から使用依拠モデルを主張している Bybee (2001) は、文法あるいは言語の持つ規則性について以下のように述べている。
- (56) "Linguistic regularities are not expressed as cognitive entities or operations that are independent of the forms to which they apply, but rather as schemas or organizational patterns that emerge from the way that forms are associated with one another in a vast complex network of phonological, semantic, and sequential relations."

  (Bybee 2001:21)

Bybee によれば、話者の知識としての言語の規則性は、音声、意味、連鎖関係 (つまり構文構造) といった側面での同一性 (identity) や類似性 (similarity) により関係づけられた膨大なネットワークから構成される。

以上に述べた、Tomasello や Bybee の使用依拠モデルを踏襲する形で、 (52) (53) の結果構文の動機付けを探ってみたい。(52) He danced himself tired の容認性についてたずねた英語母語話者の多くから、run oneself ragged とい う定着した固定表現があるので、それからの類推ではないか、という指摘を 受けた。使用依拠モデルを検証する実験的研究からも、高頻度に使用される 具体的事例(トークン)がプロトタイプとなり、他の低頻度の事例に拡張す る際のテンプレートの役目を果たしていることが指摘されている(Bybee 2008. Goldberg. Casenhiser and Sethuraman 2004, Goldberg and Casenhiser 2008)。使 用頻度の高いトークン事例はそれだけ記憶の中に深く定着していて、同じ構 文形式の新規な事例を生み出す際のアナロジーの原型となる(Bybee 2008:228)。 同様のメカニズムがここでも作用しているのではないかと仮定し、dance vourself tired を創発させるような構文のネットワーク構造を想定してみる。 インプット構文としては、母語話者に指摘された上述の run yourself ragged (以下 (57) a)、および run yourself tired (以下 (57) b)、さらに 結果構文の 統語構造のテンプレートとなる make 使役構文の make yourself tired (以下 (57) d) の 3 構文を想定する。ターゲット結果構文 dance vourself tired (以下 (57) c) はこれら三つのインプット構文のネットワークからの類推によって

創発すると想定してみる。これら三つの結果構文表現((57)  $a \sim c$ )と make 使役構文((57) d) について Google 検索をした。以下がそれぞれの件数である。

(57) a. run yourself ragged 14,000件

b. run vourself tired 30件

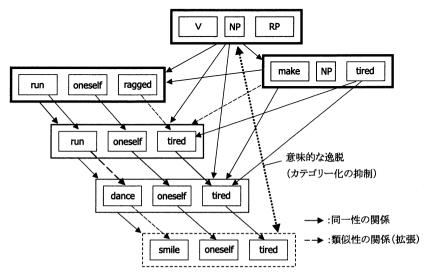
c. dance yourself tired 6件

d. make vourself tired 16.800件

以下《図10》に、これらの構文の拡張ネットワークを示す。実線の矢印は意味あるいは形式での同一性によるインプット関係、点線の矢印は意味あるいは形式での類似性にもとづくインプット関係をあらわす。インプット関係においては、矢印の始点にあるのが基本形で、矢印の先にあるのが新たに創造された用法である。またインプット関係は単語レベルと構文レベルに存在する。構成要素の語彙をまとめて囲む外側の四角は構文単位を示す。構文を囲む四角の線の太さによって、それぞれの構文の定着度の違いを示す。線が太いほど定着度は高く、点線の場合は容認度が低いことを表す。

## 《図10》

dance oneself tired と ??smile oneself tired を生じさせる構文ネットワーク (音声、意味、構造の同一性/類似性にもとづくカテゴリー化)



(57) a の run yourself ragged の結果述語 ragged は動詞派生の形容詞ではなく、 名詞派性の形容詞である (Carrier and Randall 1992:184)。したがって動詞プ ロセスの意味内容を持たないので、結果述語に生じても行為動詞 nun のプロ セスのプロファイルとの意味的な衝突がなく、問題のない結果構文となる。 上記の Google 検索例 14.000件をみても使用頻度の非常に高い定着した表現 であることがわかる。ところで語彙の意味構造が類似していることは構文パ ターンの拡張の大きな要因となる(Bybee 2001, 2008)。結果述語 ragged とター ゲット結果構文の結果述語 tired は意味的類似性が高い。この意味的類似性 が(57) b のように tired を結果述語として生じさせる要因であろう。(57) a の結果述語 ragged を動詞派生の形容詞 tired に入れ替えた (57) b の run youself tired では Google 検索結果は 30件と一挙に減少する。この件数の少な さは、tired が動詞派生であるためにプロセスの意味内容が残っていることが 原因で定使用頻度が低いのか、または別の要因によるのかは判断できない。 しかし、(57) d のように動詞を make にすると件数が膨大に増える (16.800件) ことから、(57) b の使用頻度の低さの原因は動詞 run にあるといって良いだ ろう。また見方を変えれば、(57) b は (57) a の run yourself ragged と (57) d の make yourself tired という、どちらも定着度の高い二つの構文から動機付 けられた混成構文 (Blended Construction) と考えることもできる (Fauconnier 1997, Fauconnier and Turner 1998) (14) (15)。 ragged と tired は意味的側面で類似 性があると述べたが、さらに形式的な側面においても、音声的には異なるが 文字形式では同じ -ed 形態素を共有する派生形容詞である(16)。このような意 味的側面と形式的側面の双方における類似性から、run vourself ragged ⇒ run yourself tired の使用拡張のネットワークが動機付けられる。それと同時に (57) a と d における構文全体としての統語/意味構造の同一性および類似性 も、この拡張を動機づけていることを見逃すべきではない。ここからさらに 表現要請に対応するべく、run oneself tired に対して行為動作の様態に関して 異なる指定 (dance) をするならば (57) c の dance yourself tired が生じる。し かし(57) b よりもさらに使用頻度は低くなる(Google 検索で 6 件)。さらに 拡張を進めて行為動作を smile とし (53) smile oneself tired という結果構文 になると容認性が低くなり、Google 検索でも用例がみつからない。これはこ の表現の意味構造が、結果構文 [NP1 V NP2 RP] のもつ一般的な意味構造か ら逸脱する程度が大きいためと考えられる。dancing なら身体的に疲労する

ことも推測されるが、smiling によって身体が疲れるという百科事曲的なシナ リオは想像しにくい。したがって結果構文のプロトタイプ的音味構造との不 整合性が高くなる。この意味的不整合は、カテゴリー化関係における負の要 因となる。この結果構文スキーマから smile oneself tired へのカテゴリー化の 概念構造上の抑制関係は、《図10》の双方向の太い直線矢印で示した。

#### 6.2. 構文から受ける意味強制

5 節までの議論で、結果構文の結果述語の位置には、どのようにその結果 状態に達したかという動詞的なプロセス情報がプロファイルされるような過 夫分詞は生起することができない、と論じてきた。また前節では、使用依拠 モデルに基づいて、意味や形式の類似性から新規な用法(結果述語としての tired) が容認される動機付けを考察した。しかしながら、(52) He danced himself tired の結果述語 tired は過去分詞としてのプロセス情報を果たして持っ ているのだろうか、という疑問は以前として残る。

この疑問を解決するために、Croft (2001)の 根源的構文文法 (Radical Construction Grammar) の考え方を導入する。この文法観においては、言語単 位の品詞カテゴリーとはその言語単位自体が持つ原子的な基本単位なのでは なく、その言語単位が埋め込まれた構立こそが基本であり、個々の要素がど のような品詞カテゴリーとなるかは、その構文全体の構造から決められる、 という考え方である。構文全体がゲシュタルト的存在であり、概念的にまと まったゲシュタルトをなす。その全体を構成するための構成要素として個々 の言語単位がスロットを埋めている。言い換えれば、意味の固定している要 素が集まって全体を決めているのではなく、全体がまずあって、それを創り 上げるために個々の要素が集まっている、という非環元主義的な言語観であ る。この考え方に基づけば、結果構文という全体的な事態構造把握の概念化 がまずあり、ある文がこの結果構文形式として許容される文であるというこ とは、結果的にみて個々の構成要素はその構文全体の意味に貢献することが できるような意味構造を持っていなくてはならない。極端に言えば、構成要 素はそれが生起する構文構造によって意味を変える、ということである。し かし、これは言語使用に偏在する現象である。

- (58) a. Our prof is sitting and meditating.
  - b. Rodin's Thinker sits and meditates perpetually. (Langacker 2008a:151)
- (59) a. She saw a truck run over a kitten.
  - b. She heard a truck.

(Langacker 2008b:71)

(58) a において sit と meditate は完了プロセス (perfective) を表すが、(58) b では未完了プロセス (imperfective) として使われているし、(59) a の truck は物体としてのトラックを表すが、(59) b の truck はトラックが走っている時に出す音を表す。つまり生起する構文環境によって語彙の意味構造が規定されるのである。

これと同様に、もし結果述語には動詞プロセスの意味が反映されてはならず、一定の状態を表すだけの単純形容詞でなければならないという制約が、結果構文の意味構造の一般的な制約として妥当なものであるなら、(52) He danced himself tired が英語母語話者の大多数によって容認されるということは、結果述語 tired の意味構造はこの結果構文の制約に合致していなければならない。したがって結果述語としての tired には動詞プロセス情報は消えている、ということになる。語彙要素の意味が構文全体の意味に合致するように調整されているのである。複合的な言語表現においては、全体の意味の整合性がその表現の容認可能性を決めるもっとも優位な基準となっているのではないか、と考えられるが、構文と語彙とのあいだに生じる意味構造における競合関係については今後さらに考察が必要である。

#### 7. おわりに

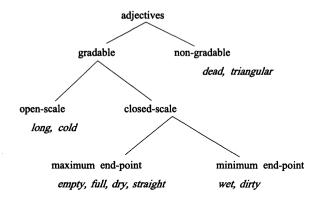
本論では、英語の結果構文において過去分詞が結果述語に生じることができないという言語事実に対して、認知言語学、認知文法の枠組みに基づき、概念構造からの説明を試みた。結論として、過去分詞が動詞のプロセス情報を結果構文全体の意味構造の中にプロファイルしてしまうので、本動詞のプロセス情報と概念上の衝突を起こしてしまうことが原因であると指摘した。またこれは単一の事態は一つの動詞(事態構造の主要部)で表わされなければならないという英語全般に成立する一般制約に従うものであり、結果構文に特異的な制約ではないことも述べた。さらに、一見したところ例外的に見える事例も、別の使用頻度の高い具体的事例との意味、形式、構文構造にお

ける類似性・同一性から動機付けを受けており、プロトタイプ的結果構文とはまったく無関係の独立した例外的事例なのではないことを使用依拠モデルに基づき示した。プロトタイプ構造をなす結果構文カテゴリーは複雑であり、結果述語をめぐって様々な制約が指摘され特殊なふるまいが報告されているが、本研究によってその一部でも明らかになったとすれば幸いである。

#### 注:

- (1) Broccias (2003)では許容例と判断されているが、アンケートを行った英語母語話者のうち10名以上が 'less acceptable' と判断したため、「??」を付けた。
- (2) maximal endpoint-scale adjective を「最大値を終点に持つような閉じたスケールを持つ形容詞」と訳した。Wechsler は Hay et al. (1999) に基づき、形容詞が動詞に派生した場合の、その動詞が表す事態のアスペクト構造から、以下のように形容詞を分類している。

Typology of adjectives (Wechsler 2005:263, 斜体は筆者による加筆)



- (3) 結果述語には前置詞句 PP で表されるものもある (ex: John sang himself <u>into exhaustion</u>) が、本論では形容詞カテゴリーの意味構造を問題にしているので、便宜的に AP (形容詞句) という表示で代表させた。前置詞句 (PP) の結果述語を排除するものではない。
- (4) 二つの下位事態をどの様に呼ぶかは、研究者によって様々である。たとえば、 Broccias (2003) と Rothstein (2004) はそれぞれを以下のように呼ぶ。

[Willy WATER the tulips] ⇒ [the tulips BECOME flat]

Broccias 2003: force component

⇒ change component

Rothstein 2004: activity event

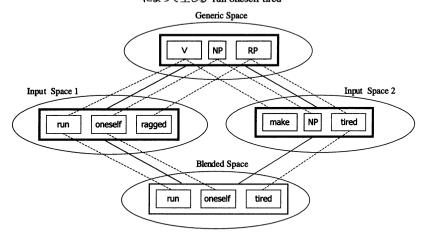
⇒ incremental process

- (5) 二つの下位事態の関係が因果関係とは判断できない結果構文の存在も指摘されている。例えば、
  - (28) b. Reluctant to let him go, the audience clapped the singer off the stage.
    - d. Mary drank John under the table / sick / dizzy. (Rothstein 2004:104)
- (6) 二つの下位事態の間にどのような関係があれば一つの結果構文として統合できる のかについては、さらなる考察が必要である。因果関係だけが要因ではないこと は、注(5)を参照。
- (7) Goldberg は、行為と結果状態の成立のあいだに時間の隔たりがあってはならないという結果構文の制約は、さらに一般的な「因果関係は直接的でなければならない」という制約の帰結である、としている(1995:195)。
- (8) Boas (2003) も同様に、make 使役構文が結果構文にとってのテンプレートの機能を果たしていると指摘しているが、しかし、Boas は make 使役構文を結果構文として扱っているのに対し、Goldberg and Jackendoff (2004) は make 使役構文を結果構文に含めていない。
- (9) 過去分詞 [PERF3] それ自体は非時間的なプロファイルを持つ。したがって受身文をつくるためには、be 動詞と統合して、be 動詞から時間的プロファイルを与えられなければならない。受身文における過去分詞 [PERF3] と be 動詞の意味的統合関係については Langacker (1991b:135-139) を参照。
- (10) ある構文形式を表すプロトタイプ的な動詞がある。たとえば、give は二重目的 語構文 (所有移動構文) を具体化するプロトタイプ的な動詞であり、become は 状態変化構文を表すプロトタイプ的な動詞である (Goldberg 1999)。
- (11) "Usage-based model" に対して「用法基盤モデル」という日本語訳もあるが、ここでは「使用依拠モデル」という日本語訳を採用する。
- (12) crooked は「プログレッシブ英語逆引き辞典」(小学館1999) では動詞派生となっている。しかし音声的には、名詞派性の ragged、four-legged のパターンに従う。
- (13) 複数のアメリカ英語母語話者から、標準的ではなく口語表現ではあるが crookeder という比較級も使われることがあると指摘された。これはその使用者が crooked を単純な形容詞として捉えている証拠の一つとして考えることができる。
- (14) run oneself ragged と make oneself tired の二構文の混成 (blending) を Fauconnier and Turner の提唱する Conceptual Blending に基づいて表示すると以下のように示すことができる。 《図10》との違いは、想定可能な複数の構文間のネットワークを強調するか、目立った直接的な二つのインプット構文だけを記述するかの違

いである。

注(14)の図

run oneself ragged と make NP tired の構文混成 (constructional blending)



- (15) Boas (2003) のコーパスデータでは、結果構文で tired と共起する動詞は make だけである。
- (16) 名詞派生の -ed 形容詞 (bearded, freckled, hooded など) と動詞派生の過去分詞 -ed 形容詞の形式面における共通性をとらえて、Langacker (1991:203-4) は、名詞派 性の [Noun+ed] を [PERFn] とし、過去分詞と同じ [PERF] の一種としてカテゴ リー化している。

#### 参考文献:

Boas, Hans C. 2003. A Constructional Approach to Resultatives. CSLI publications.

Broccias, C. 2003. The English Change Network. Mouton de Gruyter.

Bybee, Joan. 2001. Phonology and Language Use. Cambridge Univ. Press.

Bybee, Joan. 2008. Usage-based grammar and second language acquisition. In Peter Robinson and Nick C. Ellis (ed.), *Handbook of Cognitive Linguistics and Second Language Acquisition*. 216-236. Routlege.

Carrier, Jill and Janet H. Randall. 1992. The argument structure and syntactic structure of resultatives. *Linguistics Inquiry* 23, 173-234.

Croft, William. 2001. Radical Construction Grammar: Syntactic Theory in Typological Perspective. Oxford University Press.

- Fauconnier, Gilles, 1997. Mappings in Thought and Language. Cambridge University Press.
- Fauconnier, Gilles and Mark Turner. 1998. Conceptual Integration Networks. *Cognitive Science*, 22:133-187.
- Goldberg, Adele E. 1995. Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure. University of Chicago Press.
- Goldberg, Adele E. 1999. The emergence of the semantics of argument structure constructions. In B. MacWhinny (ed.), *The Emergence of Language*. 197-212. Lawrence Erlbaum.
- Goldberg, Adele E. and Ray Jackendoff. 2004. The English resultative as a family of constructions. Language 80(3), 532-568.
- Green, Geogia M. 1972. Some observations of the syntax and semantics of instrumental verbs. *CLS* 8, 83-97.
- Langacker, Ronald W. 1982. Space grammar, analyzability, and the English passive. Language 58(1), 22-80.
- Langacker, Ronald W. 1987/1991a. Foundations of Cognitive Grammar. Vol.1/2.
  Stanford University.
- Langacker, Ronald W. 1991b. Concept, Image, and Symbol: the Cognitive Basis of Grammar.

  Mouton de Gruvter.
- Langacker, Ronald W. 1999. Grammar and Conceptualization. Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 2008a. Cognitive Grammar: a Basic Introduction. Oxford University

  Press
- Langacker, Ronald W. 2008b. Cognitive grammar, cognitive linguistics, and second language learning and teaching. In Peter Robinson and Nick C. Ellis (ed.), *Handbook of Cognitive Linguistics and Second Language Acquisition*. 66-88. Routledge.
- Rapoport, T.R. 1993. Verbs in depictives and resultatives. In J. Pustejovsky (ed.), *Semantics and the Lexicon*. 163-184. Kluwer Academic Publishers.
- Rothstein, Susan. 2004. Structuring Events; a Study in the Semantics of Lexical Aspect. Blackwell.
- Tomasello, Michel. 1999. *The Cultural Origin of Human Cognition*. Harvard University Press.
- Vanden Wyngaerd, Guido. 2001. Measuring events. Language. 77 (1), 61-90.
- Vendler, Zeno. 1967. Linguistics in Philosophy. Cornell University Press.
- Wechsler, Stephen. 2001. An analysis of English resultative under the event-argument homomorphism model of telicity. *Proceedings of the 3rd Workshop on Text Structure*. University of Texas, Austin, 2000.
- Wechsler, Stephen. 2005. Resultatives under the 'event-argument homomorphism' model of

telicity. In Nomi Erteschik-Shir and Tova Rapoport (ed.), The Syntax of Aspect: Deriving Thematic and Aspectual Interpretation. 255-273. Oxford University Press.

上原聡・熊代文子 2008 『音韻・形態のメカニズム』研究社

大堀壽夫 2001 『認知言語学』東京大学出版会

小野尚之 2007 『結果構文の新視点』ひつじ書房

影山太郎 2001 『日英対照動詞の意味と構文』大修館書店

都築雅子 2006 「行為連鎖と構文 II:結果構文 | 中村芳久編『認知文法論 II』89-135. 大修館書店